

我が国発の化学論文が減り続けている！

何が起きているのか、我々は何をなすべきか。

日時： 2013年3月24日(日) 9:30~12:30

会場： 立命館大学びわこ・くさつキャンパス S4 会場 (コラーニングハウス I C108 教室)

主催： 日本化学会 戦略企画委員会

共催： 科学技術政策研究所

後援： 日本学術会議、科学技術振興機構、日本学術振興会

趣旨：

・文部科学省科学技術政策研究所から公表された「科学研究のベンチマーキング 2011」において、化学分野の論文数は主要国(米国、中国、英国、ドイツなど)で増加傾向にあるが、我が国の化学分野の論文数はこのような流れと逆行し、漸減していることが指摘された。今、研究現場で何が起きているのか。その背景には、運営費交付金から競争的資金への移行による研究費の偏在、選択と集中の弊害、評価疲れ、5年任期制導入、多様な短期・時限プロジェクトによる研究の断片化、ポスドク問題、掛け声だけの国際化、内向き志向の若者など多様かつ複合化した要因が考えられる。そこでこの喫緊の課題について論議し、対策を探りたい。

・また、被引用数の高いトップ10%論文数に関しても、米国、中国、英国・ドイツが我が国より上位にランクしている。英独両国は我が国より研究者数、研究費ともに少ないにも関わらず、どんな背景があり、努力がなされているか。

・さらに、基礎研究~応用研究~商品化という我が国トータルの強みの中で何が起きているのか、産業力の観点からも、併せて論議する。

プログラム：

9:30~9:40 「挨拶・趣旨説明」 玉尾 皓平 (日本化学会会長)

9:40~10:20 「科学計量学から見た日本の化学の実力と課題」

桑原 輝隆 (文部科学省科学技術政策研究所所長)

10:20~10:40 「ドイツの化学分野での国際的実績—統計的データと背景」

イリス・ヴィーツォレック (株式会社 IRIS 科学・技術経営研究所 代表取締役社長)

10:40~11:00 「論文データにみる日本の化学、アジアの化学」

棚橋 佳子 (トムソン・ロイター シニアディレクター)

11:05~12:30 パネル討論

渡辺 芳人 (日本化学会筆頭副会長 / 名古屋大学副総長) [司会]

桑原 輝隆 (文部科学省 科学技術政策研究所所長)

岩澤 康裕 (日本化学会前会長 / 電気通信大学特任教授・燃料電池イノベーション研究センター長)

有本 建男 (政策研究大学院大学教授 兼科学技術振興機構・研究開発戦略センター副センター長)

山本 尚 (中部大学教授・分子性触媒研究センター長)

谷口 功 (熊本大学学長)

川上 文明 (日本化学会理事 / 旭化成株式会社 新事業本部担当部長)